

はじめに

ブラジルでは未開地域開発拠点としての都市建設が1500年の大陸発見以来、積極的に推し進められてきた。それらは主として記憶のイメージ、シンボル性、美観などを探求、引用すると言うプロセスを通じて行われてきた都市建設であった。植民都市、移民都市、開発都市などの一般的都市と平行して、首都や州都の移転、建設も多く行われ、そこにはパラダイムをこえていこうとする姿勢が見られる。

都市プランの系譜

都市プランはさまざまな要因によって規定されるが、それらは大きく、地形などの自然条件、地域及び時代の文化と都市機能によって分けられる。同時代に異なる開発主体が見られるブラジルでは実にさまざまな形態の都市が出現した。本研究ではピーツによる形態系譜学的アプローチに着目し、それぞれの都市形態とその展開を明らかにすることを試みた。分析は都市のイニシアル・プランとそのコンセプトを中心に行う。

街路パターンのタイプ

新都市の街路パターンは一般に混合タイプが多いが、ブラジル諸都市では基本的に、1. 不定形、2. グリッド、3. ダイアゴナルと同心円の3つのタイプに分類できる。

- ・不定形パターンは、広場中心の初期ポルトガル植民都市や街路中心のドイツ系移民都市などに見られる。また、例外的であるが、不定形で水路が都市骨格となるオランダ系植民都市は興味深い。

- ・グリッド・パターンは、その測量のしやすさや計画的イメージなどの点から、最も多く取り入れられた。そのため開拓都市などに多く、日系移民都市の理想的都市の計画にも現れる。

- ・ダイアゴナル・パターンは印象深いため、都市性演出のエレメントとして導入された。見て美しいプランはペロ・オリゾンテ、ゴイアニアなどの州都計画に取り入れられる他、開拓都市にも受け入れられていく。

本研究では同心円パターンを対象としない。

都市形態引用

都市を計画するにあたり、既存の都市の形態引用がひとつの手法として使われ、伝統的形態の他に、ワシントン、ベルサイユなどの他にブラジリア、そして田

園都市イメージがよりどころとされた。

植民都市ではその形態が国家の象徴とも、力の誇示としてもとらえられる。ポルトガル人とオランダ人の計画による都市の例が指摘できる。

移民都市では比較的閉鎖性の強い理想的移住地建設というパラダイムのもとに伝統的形態が受け入れられる。ドイツ系移民都市がその例である。日系移住地の場合、新都市建設の伝統がなく、そのパターンは時期別に変容していくが、ブレ満州といえる諸都市が興味深い。

イギリス系開拓都市では街路パターンが都市別に大きなバラエティーを見せる。それは個々の都市にアイデンティティーを与えるために必要な手法であったかも知れない。たとえば3本の街路が一か所で交差する『あひるの足』といわれる三角形は造形的で魅力演出の一部として取り入れられていった。

一方、アンウィン、アガシェ、コルブジェなど海外のデザイナー達のブラジルにおける設計もかなりの影響を及ぼしている。

そして近代都市計画の象徴としての『威厳ある都市』ブラジリアではルシオ・コスタのコメントからプランに込められた意味を再発掘する。周辺の衛星都市にはそのモデルに近づこうとする意向が見られる。ポスト・ブラジリア都市は新たな展開を見せる。

これらブラジルの諸都市には都市デザイナーのコンセプトが色濃く現れるケースがいくつもあるが本研究では文化、歴史、引用と言ったキーワードを指標とした都市づくりの可能性の一部を系譜学的に解明、ダイアグラムを作成することを試みている。

そこに21世紀都市の記号が組み込まれていて、そのストックを生かすことによって新しい都市像が見えてくると思えてならない。